日刊建設工業新聞
The Daily Engineering & Constraction News
2020.3.27(金)
C323-1
(発売日:2020年3月27日)

# 菊川工業 金属内外装品の魅力発信

## ショールームに建築模型など200点

## 自由度高い造形・多様な質感 工場で加工現場見学も

約200点の展示品が並ぶ

金属加工メーカーの菊川工業（東京都墨田区、宇津野嘉彦社長）が、ショールーム「Studio K+（スタジオ・ケー・プラス）」を通じた金属内外装品の魅力発信に力を入れている。同社が実際に携わった建築プロジェクトのミニチュア模型など約200点を展示。「建築界のノーベル賞」といわれるプリツカー賞受賞者の作品を紹介するコーナーも充実させるなど、来訪者の目を楽しませている。

宇津野社長

Studio K+は、金属内外装品の魅力を建築関係者にもっと知ってもらいたいという思いから開設した。金属素材は、自由度の高い造形と多様な質感を持つ一方、複雑で華美なデザインをオーダーメードで加工すると、コストが高くなってしまう。1990年代初頭のバブル崩壊以降、事業者や発注者のコスト抑制意識が高まり、オーダーメード品の需要は大きく減少。規格化された既製品が市場にあふれるようになった。

宇津野社長は「コストに縛られ、自分が考え求める部材を使えない設計者は、ストレスがたまる一方ではないか」と指摘する。建築設計者が金属加工による造形の可能性に触れ、自分のアイデアを具現化するための場としてショールームを開設した。名称の+（プラス）には金属加工品の価値を再発見し「プラスアルファの発想を広げる場」にしたいという思いが込められている。

同社は、Studio K+を本社周辺ではなく、千葉県白井市の自社工場敷地内に設けた。宇津野社長は「Studio K+と工場は車の両輪。展示物と合わせて加工の現場が見学できるので、顧客にも金属製品の良さを理解してもらえる」と胸を張る。問い合わせや商談に使う機会も徐々に増えてきているとも語る。

同社は、1933年の創業以来培ってきたノウハウや加工技術の継承を大切にしつつ、多様化する顧客からの要望に応え、新しい技術を積極的に取り入れた製品を数多く生み出している。Studio K+は、脈々と受け継がれるこうした企業哲学を次の世代へ残す「アーカイブ」の役割も担っている。